

年間第二十七主日

2019.10.6

ルカ 17・5-10

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

今日の福音は、弟子たちが「わたしたちの信仰を増してください」と願った時に、イエスさまが語られた驚くべきおことばと、それに続いて、しもべであるとはどのようなことであるかを諭されたイエスさまのおことばを伝えています。今日のミサで聴いた、このような区切り方に従って、ご一緒に今日の福音のイエスさまのおことばを味わわせていただきたいと思います。

「わたしたちの信仰を増してください」と願った弟子たちの願いは、わたしたちの願いでもあります。わたしたちも自分の信仰の足りなさ、信仰の弱さを日々痛感させられるからです。けれども、「わたしたちの信仰を増してください」と願った時、弟子たちはそのように願うことによって、信仰ということに何を期待していたのでしょうか。イエスさまに願い求めた信仰をもって、何をしようとし、どのようになりたいと願っていたのでしょうか。そもそも、彼らは信仰をどのようなものとして受け止めていたのでしょうか。

これは憶測ですが、おそらく、弟子たちは自分たちの信仰がもっと増し加えられて、しっかりとしたものとなれば、自分たちもイエスさまがしておられるようなことが出来るようになれると期待していたのかもしれない。尊敬する師匠のようになるということが、弟子である者に共通する夢であり目標だからです。けれども、そこに錯覚がある、大きな落とし穴があるとイエスさまは弟子たちに警告を発しておられるのではないのでしょうか。どういうことかと言うと、弟子たちは自分たちの信仰にこだわって、信仰というものを何か自分たちが修行して身につけるべき能力のように思っていたのかもしれない。自分たちの信仰が増し加えられて、しっかりとしたものになれば、その信仰をもって、人々の求めに応じて、自分たちにもイエスさまがなさっておられるような奇跡の業を行うことが出来るようになると弟子たちは思っていたのかもしれない。そこまであからさまには言わなくとも、弟子たちは信仰ということ、イエスさまに願って増し加えられ、強められるべき自分たちの能力のように思っていたのです。そのような弟子たちに対して、イエスさまは、弟子たちが、そしてわたしたちがそのような信仰についての考え方をもっているかぎり、決して理解することができないような、そのことにどのような意味があるか分からない、ありうべからざることを語られます。

「あなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても言うことを聞くであろう」。これはどういうことなのでしょう。このおことばでイエスさまは何を諭されようとしておられるのでしょうか。

「あなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば・・・」というおことばは、わたしたちに馴染み深い、イエスさまのからし種のたとえ話を思い出させます。からし種はイエスさまがわたしたちの中に蒔いてくださった神のみことばです。「あなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば・・・」とイエスさまは言われますが、その種はすでにわたしたちの中に蒔かれているのです。「自分たちの信仰の足りなさを嘆く前に、わたしを信じたことによって、すでにあなたがたの中に蒔かれているわたしのことばに心を留めなさい。あなたがたが生きている現実においては、それはからし種ほどにしか思えないかも知れないけれども、そのからし種に心を向けなさい」とイエスさまは諭しておられるのです。信仰が増し加えられ、強められることを願うのなら、わたしがあなたがたの中に蒔き、あなたがたが受け止めた、そのからし種があなたがたの中で成長するように願いなさいとイエスさまは励ましてくださっているのです。

イエスさまがその全生涯を通してわたしたちに示してくださった父なる神への信仰は、文字通り、幼子のようになって、父なる神を「アッパ」とお呼びするほどの、信頼そのものです。父に願いさえすれば、それがわたしたちのためになるなら、父なる神はどんなことでも聞き届けてくださるとの絶対的な信頼に身をゆだねることです。そのようなイエスさまのありかたからすれば、桑の木が根こそぎ抜け出て海に根を下ろすというような、人間であるわたしたちには明らかに不可能と思われることを実現するのも、神さまのなさることであり、わたしたちの信仰の力によることではないのです。信仰とはそのようなことであるから、信仰の多寡が問題なのではない、信仰が強いか弱いかが問題なのではない、不可能を可能としてくださる父なる神への信頼に満ちた信仰で十分なのだと言葉でイエスさまは諭してくださるのです。願うとすれば、そのような父なる神への信頼に満ちた生き方を、わたしのもとに来て学びなさいと、イエスさまはわたしたちをも招いていてくださるのです。

それにしても、今日のルカによる福音では、イエスさまはなぜ桑の木を引き合いに出して、信仰について語っておられるのでしょうか。同じ内容のおことばを伝えるマタイ福音書の箇所を見ると、そこでは、移し変えられるのは桑の木ではなく、山になっています。「たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がなければ無に等しい」とコリントの信徒への第一の手紙でも言われているように、こちらの表現のほうがわたしたちにはなじみ深いかもしれません。ここでは、ルカ福音書のイエスさまの今日のおことばは、山ではなく

桑の木という表現を用いて何を言おうとしているのかということを考えてみたいと思います。

これも憶測ですが、ここで、イエスさまは桑の木について語ることによって、わたしたちの中に深く根を張っているものを問題にしておられるのではないかと思います。わたしたちの中に根を張っているものとは、たとえば、今日の福音の箇所直前でイエスさまは兄弟をゆるしなさいと言われていますが、わたしたちの中には、どうしてもゆるすことが出来ないという思いが深く根を張っているかもしれません。そのような自分に気づく時、信者となったわたしたちは、自分の信仰に失望します。どうしてそうなるかと言えば、わたしたちはゆるせないという自分のありようを、自分の信仰によって何とかしようとするからです。その結果、自分の信仰の至らなさを思い知らされ、信仰に傷つくことになります。そのようなわたしたちに、イエスさまが諭してくださるのは、わたしたちの中に根を張る桑の木をすっぱりと抜き取って、移し変えるのは、わたしたちの信仰の力によるのではなく、神さまだけにお出来になることであり、わたしたちに必要なことは、そのような不可能を可能にしてください。父なる神の全能の力に、どこまでも信頼することだということです。

このように考えると、今日の福音で、信仰について弟子たちを諭されたあと、イエスさまがしもべについてのお話をする意味が分かるような気がします。しもべは、自分に与えられた仕事を果たしても、それを自分の手柄のように考えることはありません。主人からのあらたまの特別なねぎらいも期待してはいません。いつものようにその日の仕事を終えて、主人が何も言わずに、自分が給仕したものを食べてくれば、しもべの一日は終わるのです。イエスさまに付き従って行く道の途中で、自分たちの信仰を強めてくださるように願った弟子たちは、イエスさまのこのお話を聞いてどのように思ったのでしょうか。弟子たちに聴く耳があったら、イエスさまのこのお話を聞いて、自分たちがあのようなことを願ったことを恥ずかしく思いながらも、きっとホッとしたにちがいありません。自分たちとともにいてくださるイエスさまの押し寄せて来た人々の去った後のお姿を見ている弟子たちには、イエスさまがこのお話によって御自分のことを語っておられるのだと気付くことができたにちがないからです。一日の終わりに、全てを神さまの御手に委ねて憩われるイエスさまのお姿を見て、弟子たちもまたその一日の自分たちの様々な思いが解消されてゆく心地よさを味わうことが出来ていることに気付いたことでしょう。イエスさまはそのお姿をもって、弟子たちをそしてわたしたちを神のしもべとして生きる軽やかな生き方へと誘ってくださるのです。信仰とは、大いなる信頼のうちに神のしもべとして生きたイエスさまの後にどこまでも付いて行くことなのです。そのように生きることのできる恵みを願ってこのミサをおささげいたしましう。